

11月後半にナムソン村では播種を行い、2010年の1月に田植えを行いました。ディックザオ村では12月に播種を行い、1月に田植えを行いました。今のところ、2つの村では稲が順調に育っています。一方、フォーヴィン村では旧正月が明けた3月に入っても雨が降らず、田植えができません。無事に収穫までこぎつけるかどうか、心配です。

また、2010年1月から在来稲について村人と共に調査を始めました。どんな種類がある/あったのか、それぞれの種類の特徴、育て方や食べ方、香りや食味などをまとめ、「稲の履歴書」のようなものを作成し、村の財産として次世代に伝え、活用してもらうことが目的です。各村で簡単に聞き取りをただけでも、15～20種類が確認されました。こういう時に力を発揮するのは、やはり年配の方々。特に女性は実際に田植えや料理をしているため、個々の種類の違いについて、とても詳しく覚えており、一生懸命話してくれます。2010年の夏には「稲の履歴書」として完成させる予定です。



ナムソン村ブオン集落で復元する稲の粉を選んでいる女性達。



播種した後の苗を確認している  
ナムソン村ブオン集落のトゥオンさん。

## Bạn làm gì đấy?



## 何してるの?

ディックザオ村のBùi Thị Hồngさん  
(28歳、2人の娘さんとご主人の4人家族)

「田んぼから cây Bèo (アゾラ) を採って来まして。これから、豚にあげます。今年の苗の状態はなかなかです。大変だけど子供達のために頑張って稲を育てます。」

## アヒル水稻同時作に関わる人々の全国ネットワークづくり



1990年代より、ベトナムの農家にとって応用しやすい技術として広まってきたアヒル水稻同時作（日本では合鴨農法として知られています）。現在、ベトナム北部のハイフォン市、ホアビン省、ベトナム南部のドンタップ省やベンチェ省で実践されています。

ハイフォン市では、2009年に市内の6つの郡と2つの区で約1,000世帯が184haでアヒル水稻同時作を実践しました。ハイフォン市の農家はアヒルの販売による現金収入の増加、除草の手間が省けること、ジャンボタニシを抑えることができること、農薬を利用しなくなるなどから、この農法を選び、実践しています。一方、無農薬で育てたコメにどのように付加価値をつけて売っていくかが大きな課題となっています。

また、ホアビン省タンラック郡内3村では1,390世帯のうち、620世帯が実践した他、他の村もわずかではありますが、実践する農家が増えています。タンラック郡は山岳地域に近いので、棚田が多く、一世帯あたりの水田面積は非常に小さいです。タンラック郡の農家はアヒル水稻同時作を応用することで、狭い面積を有効に活用し、コメだけではなくアヒルの肉も得ることができます。つまり、食料自給の改善と現金収入の増加を見込めることが、大きなインセンティブとなっているのです。

一方、メコンデルタに位置するドンタップ省では、1990年代にアヒル水稻同時作が実践されていたものの、鳥インフルエンザの拡大によって、アヒル肥育そのものができなったり、或いは、規模を縮小して行わざるを得ない状況が続いています。しかし、稲の大敵、ウンカが大量に発生するようになったため、アヒル水稻同時作が再評価され、2010年にドンタップ省農業普及センターのプログラムとして取り組まれる予定です。

また、ベンチェ省ビンダイ郡ではエビ養殖とアヒル水稻同時作を交互に実践するというユニークな方法が採られています。2008年には250世帯が190haで実践し、2009年には435世帯、237haに増加し、2010年には1,330世帯、930haで実践される予定です。ベンチェ省農業普及センター、ビンダイ郡農業普及所および農業室の連携により、農家に対する技術研修や財政的な支援が行われる予定です。

北部では、日本で合鴨農法の技術を体系化された古野隆雄さんにも参加して頂き、経験交流や技術研修を行ってきました。そのため、すでにキーパーソンとなる方がハイフォン市やホアビン省に存在し、彼らを通じて、技術研修や経験交流を行うこ



村をあげてアヒル水稻同時作に取り組むハイフォン市アンラオ郡チエン・タン村で、共産党書記のラックさんと実践農家のフィエットさん、ベトナムのアヒ水稻同時作の父である、ニューさん、VACVINAハイフォン市の販売促進係のクックさんと実施状況やコメとアヒルの肉の販売方法について意見交換をしている様子。



エビ養殖とアヒル水稻同時作を交互に実践しているビンさん。水田の畦を利用して唐辛子や果物の木を植えている。